自尊感情を高める道徳教育の工夫
― 中学年における相互理解を深める道徳学習プログラムの開発を通して ―

江田島市立大古小学校　杉井　友子

研究の要約

本研究は，自尊感情を高める道徳教育の工夫について，中学年における相互理解を深める道徳学習プログラムの開発を通して考察したものである。文献研究から，自己評価には，自分自身についての多面的な自己理解を促す側面があることから，自己評価の力を高めることが自尊感情を高めることにつながると分かった。また，自己と他者がもつ考えを出し合い，相互理解を深めることが，新たな自己の発見になることも分かった。そこで，自分のよさについて自己理解を図る段階と友だちと互いのよさについて相互理解を図る段階を設定し，各段階で内容項目「個性の伸長」又は「相互理解，寛容」を中心的に取り上げて指導し，道徳科と学級活動との関連を図った。その結果，児童は自分のよさを複数の観点から多面的に評価できるようになり，自尊感情を高めることができた。このことから，本学習プログラムは，自尊感情を高めることに有効であると分かった。

キーワード：自尊感情　相互理解　自己評価　道徳学習プログラム

Ⅰ　主題設定の理由

中央教育審議会答申（平成20年）では，主体的に判断し，適切に行動できるようになるための基盤として，自尊感情などの道徳性を養うことの必要性が示されている。また，子どもの徳育に関する懇談会（平成21年）では，現代の子供の成長と徳育をめぐる今日的課題として，日本の子供たちが，諸外国と比べて自尊感情が低いという指摘があることを受けて，小学校中学年から高学年の時期における子供の発達において，重視すべき課題として自己肯定感の育成や自他の尊重の意識，他者への思いやりなどの涵養を挙げている。

所属校第３学年児童に実施した道徳アンケートの結果において，質問項目「自分にはよいところがある。」に対する肯定的回答は66.7％（全校平均73.4％）であった。このことから，当該学年の児童は，自尊感情が低いことが課題であるといえる。これは，東京都が平成20年に児童・生徒に実施した自尊感情に関する調査の結果，自尊感情が小学校第１学年から中学校第２学年まで次第に下がる傾向が見られるとともに，小学校では他の段階と比べて中学年段階で大きく下がることが明らかとなったこととも一致している。

永田繁雄（2006）は，自己評価には，自分自身についての多面的な理解を促す側面があることから，自己評価の力を高めることが，自尊感情を育てることにつながると示している。また，谷川彰英（1996）は，自己と他者がもつ考えを出し合い，相互の考えを比較することで共通性や差異性を見いだしたり，自己の考えを見直したり，付加修正したりして，新しい自己の考えを作り出したりすることが，新たな自己の発見になると述べている。このことから，児童が他者と互いの考えを出し合い，相互理解を深めることを通して，新たな自己を発見することが自己評価の力を高めることになり，さらに自尊感情の高まりにつながっていくと考える。そこで本研究では，自己評価の力を高めることを通して，自尊感情を高めるために，相互理解を深める道徳学習プログラムを開発する。

本研究においては，小学校学習指導要領（平成27年，以下，学習指導要領とする。）で中学年に追記された「相互理解，寛容」の内容項目を扱う道徳の授業を要とした道徳学習プログラムの開発という点で先進性があると考え，本主題を設定した。

Ⅱ　研究の基本的な考え方

１　自尊感情を高める道徳教育について

(1) 自尊感情とは

「心理学辞典」（1999）では，自尊感情は「自己に対する評価感情で，自分自身を基本的に価値あるものとする感覚。」[1] と示されている。さらに，諸富祥彦（2015）は，自尊感情を自己肯定感の認知的側面であると捉え，自分のよさを自分で評価し，自分の価値を認識できることに伴う肯定的感覚であると述べている。

これらのことから,本研究における自尊感情とは,自分のよさに気付き，よさを認めることを通して，自分を価値あるものと感じる気持ちであると考える。

(2) 自尊感情を高めるには

中央教育審議会答申（平成20年）においては,「道徳教育については，その課題を踏まえ，小・中・高等学校の道徳教育を通じ，人間尊重の精神と生命に対する畏敬の念を培い，自立し，健全な自尊感情をもち，主体的，自律的に生きるとともに，他者とかかわり，社会の一員としてその発展に貢献することができる力を育成するために，その基盤となる道徳性を養うことを重視する。」[2] と述べられている。これは，道徳教育で道徳性を養うことが健全な自尊感情を育てることにつながると捉えることができる。また，永田（2006）は，子供の自尊感情が二極化し，自信がもてずに居場所が不安定な子供が見られる一方で，肥大化した自尊感情によって，幼児的な万能感をもち，他者への共感が乏しく，自己正当化傾向が強い子供も見られることから健全な自尊感情を育てることが求められると指摘している。そして，この自尊感情の二極化に対して，「自己評価力を高めることはその抑止力となり，健全な自尊感情を生み出す力になるのである。」[3] と述べている。さらに，健全な自尊感情には，「これでよい」「このままでいい」と感じる現状志向的な面と「自分ならもっとできる」「もっとよくなりたい」と思う上昇志向的な面があると述べている。そして，健全な自尊感情を生み出す自己評価は，自分自身についての多面的な理解，自分への謙虚な自信，自己実現への方向性の自覚，よりよくなろうとする意欲や態度という側面をもっているとも述べている。

これらのことから，健全な自尊感情には，現状志向的，上昇志向的な面があり，これら両面を高める必要がある。そのためには，自分自身についての多面的な理解，自分への謙虚な自信，自己実現への方向性の自覚，よりよくなろうとする意欲や態度を生み出す自己評価の力を高めることが大切であると考える。

(3) 自己評価の力を高めるとは

梶田叡一（1996）は，自尊感情が生じる基盤となる自己概念の育成について，自分自身について多面的に知り，理解していくことや現実の自己のよい面も不十分な面も受容するようになることが必要であると述べている。また，中間玲子（2014）は，ある一面での否定的な自己評価によって，自己全体への否定的感情が強化され，評価自体が非現実的なものとなってしまうことがあり，そのような場合には，自己に対する分化させた見方をもつことや否定的な自己を自己の他の部分との関係において相対化できるようになることが必要であると述べている。さらに，「生徒指導提要」（平成22年）では，自己を評価するときに単一の評価尺度しかないと，ある領域で失敗した場合，劣等感が生じやすくなってしまうことから，複数の観点から自己を評価できることがよいと述べられている。

これらのことから，本研究において，自己評価の力を高めるとは，現在の自己を受容することや自分のよさを複数の観点から多面的に評価することができるようになることと考える。

2　中学年における相互理解を深める道徳学習プログラムについて

(1) 相互理解を深めるとは

多田孝志（1997）は，相互理解における「理解」について，自己理解と，他者理解の二つの領域があると述べている。さらに，自己理解とは，自分自身を見つめ，自分の生き方や考え方などについて自覚し，理解することであり，他者理解とは，他者を自分と同じ人間として尊重し，その生き方や考え方を認め，理解することであると述べている。そして，相互理解について，相手の考え方をそのまま受け入れるのではなく，自分の生き方や考え方をしっかりもちながら，相手の生き方や考え方を理解していくことが重要であると述べている。さらに，相互理解において，自己を理解することは他者を理解することにつながり，他者を理解することは自己を理解することにつながると述べている。

これらのことから，本研究における相互理解とは，自分の立場や考えをしっかりもちながら，他者の立場や考えを理解することであるとともに，他者の立場や考えから自分の立場や考えを理解することと考える。そして，相互理解を図るためには，まず自分の生き方や考え方をもつために自己理解を深めるこ

とが必要であると考える。そして，前述のように谷川（1996）は，自己と他者がもつ考えを出し合い，相互の考えを比較することで共通性や差異性を見いだし，自己の考えを見直したり，付加修正したりして，新しい自己の考えを作り出すことが，新たな自己の発見になると述べている。

これらのことから，本研究において相互理解を深めるとは，自己の立場や考えと他者の立場や考えを比較したり，一つにまとめたりすることで新たな自己を発見することと考える。

(2) 中学年における相互理解を深める意義

「生徒指導提要」（平成22年）には，小学校中学年の児童は，気の合う同性のメンバーが集まって，自発的に仲間集団を形成するようになり，メンバー同士の結束が強く，一緒に遊ぶことを楽しむようになると述べられている。しかし，その一方で，小学校学習指導要領解説特別の教科　道徳編(平成27年，以下「解説」とする。）では，中学年の児童は，自分と他者の考え方や感じ方の違いを受け止められずに感情的になったり，それらの違いから対立が生じたりすることも少なくないと述べられている。また，学習指導要領では，内容項目「相互理解，寛容」が中学年に追記された。「解説」に学年段階ごとに整理されている内容項目「相互理解，寛容」の指導の観点を表１に示す。

表１　学習指導要領における内容項目「相互理解，寛容」の指導の観点

小学校	低学年	設定されていない。
	中学年	自分の考えや意見を相手に伝えるとともに，相手のことを理解し，自分と異なる意見も大切にすること。
	高学年	自分の考えや意見を相手に伝えるとともに，謙虚な心をもち，広い心で自分と異なる意見や立場を尊重すること。
中学校		自分の考えや意見を相手に伝えるとともに，それぞれの個性や立場を尊重し，いろいろなものの見方や考え方があることを理解し，寛容の心をもって謙虚に他に学び，自らを高めていくこと。

「解説」には，内容項目「相互理解，寛容」が中学年に追記された理由として，自分と異なる立場や考え方などを理解して，望ましい人間関係を構築できるようにすることを重視したことによると述べられている。これは，前述のような小学校中学年の児童の発達の段階の課題を踏まえて追記されたと考えられる。児童が，自分と他者の考え方や感じ方の違いから生じた対立を解決するためには，自己の視点と他者の視点を両方もち，相互にほどよく調整する能力が求められる。特に他者の気持ちや立場を推測する能力を役割取得能力といい，この役割取得能力について，渡辺弥生（2011）は，表２のように五つの発達段階を示している。これによると，小学校中学年の児童は，レベル２の発達段階に相当し，他者の視点から自分の思考や行動について内省できるようになる段階であることが分かる。

表２　役割取得能力の発達の段階

レベル	発達段階	特徴
0	自己中心的役割取得（３～５歳）	自分と他者の視点を区別することが難しい。
1	主観的役割取得（６～７歳）	自分の視点と他者の視点を区別して理解するが，同時に関連付けることが難しい。
2	二人称相応的役割取得（８～11歳）	他者の視点から自分の思考や行動について内省できる。
3	三人称的役割取得（12～14歳）	自分と他者の視点以外，第三者の視点をとることができるようになる。
4	一般化された他者としての役割取得（15～18歳）	多様な視点が存在する状況で自分自身の視点を理解する。

これらのことから，自分の考えを伝えるとともに，自分と異なる考えも大切にすることを通して，自己の立場や考えと他者の立場や考えを比較したり，一つにまとめたりすることで新たな自己を発見することができる相互理解を深める道徳学習プログラムに取り組むことに意義があると考える。

(3) 道徳科と特別活動との関連

「解説」では，各教科等と道徳科の指導のねらいが同じ方向であるとき，学習の時期を考慮したり，相互に関連を図ったりして指導を進めると，指導の効果を一層高めることができると述べられている。そして，小学校学習指導要領解説特別活動編（平成20年，以下，特別活動編とする。）では，道徳の時間での指導が特別活動における具体的な活動場面の中に生かされ，具体的な実践や体験などが行われることによって，道徳的実践力と道徳的実践との有機的な関連を図る指導が効果的に行われることにもなると述べられている。また，豊泉清浩(2011)は，各教科や特別活動等は道徳的体験の場であり，道徳科はその体験の意味を考え，道徳的価値の自覚を深め

る場であると述べている。さらに，特別活動は道徳科で深めた道徳的価値の主体的な自覚を確固としたものとするための道徳的実践の場でもあると述べ，道徳科と特別活動は，相互に強い関係性をもっていると述べている。

これらのことから，道徳科と特別活動との関連を図ることで，児童が，より主体的かつ強固に道徳的価値の自覚を深めることができるようになると考える。

(4) 相互理解を深める道徳学習プログラムとは

本研究では，自尊感情を高めるために自己評価の力を高めることを目指し，道徳科と特別活動とを関連させた相互理解を深める道徳学習プログラムを開発する。道徳科においては，自分の特徴を多面的に捉えることや長所を伸ばすことなどに関する内容項目「個性の伸長」と前述の「相互理解，寛容」を取り上げることが有効であると考える。「解説」では，内容項目「個性の伸長」と「相互理解，寛容」の指導の要点について，表３のように述べられている。

表３　内容項目の指導の要点[1]

内容項目	指導の要点
個性の伸長	友だちなど他者との交流の中で互いを認め合い，自己を高め合える場を設定し，長所を伸ばそうとする意欲を引き出す。
相互理解，寛容	児童同士，児童と教師が互いの考えや意見を交流し合う機会を設定し，異なる考えや意見を大切にすることのよさを実感できるようにする。

田沼茂紀（2013）は，学級活動の内容と深く関連する道徳科の内容項目とを配慮して指導することがより大きな指導効果を生むことになると述べている。そこで，本プログラムでは，特別活動の四つの内容の一つである学級活動との関連を図ることとする。なお，学級活動では，特別活動編に示された活動内容（２）のウ「望ましい人間関係の形成」と活動内容（１）のア「学級や学校における生活上の諸問題の解決」での話合い活動を扱うことが有効であると考える。

これらのことから，本プログラムでは，相互理解を深めるために，まず，自分のよさについて自己理解を図る段階を設定する。

ここでは内容項目「個性の伸長」を中心的に取り上げ，道徳科と学級活動との関連を図る。そして，道徳科では，誰にでもよい所があることや長所についての理解を深め，自分の長所を積極的に見付けようとする意欲を育てる。その後，学級活動（２）の友だちと互いのよさを見付け，カードに書いて伝え合う道徳的実践へとつないでいく。友だちから自分のよさを伝えてもらうことで自分のよさについての理解を深めることができると考える。

次に，友だちと互いのよさについて相互理解を図る段階を設定する。ここでは内容項目「相互理解，寛容」を中心的に取り上げる。そして，道徳科では，自分の考えや意見を伝えるとともに相手を理解し，自分とは異なる考えや意見も大切にしようとする意欲を育てる。その後，学級活動（１）の話合い活動と集会活動での道徳的実践へとつないでいく。自分の考えと友だちの考えの違いをよさと捉え，互いのよさを理解し合うことでよりよい考えを生み出せることを実感することができると考える。これまでの考えを基にした本研究の構想図を図１に示す。

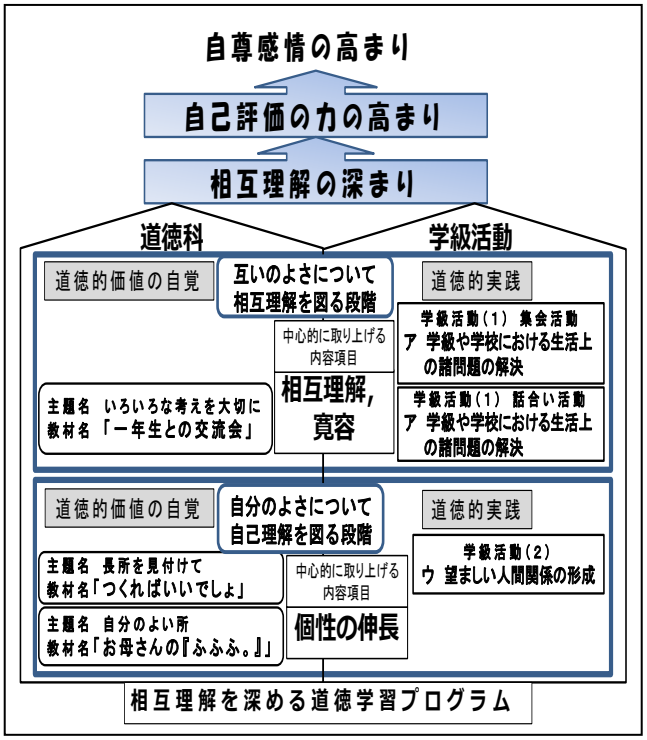

図１　研究構想図

Ⅲ　研究の仮説及び検証の視点と方法

１　研究の仮説

道徳科と学級活動とを関連付けた相互理解を深める道徳学習プログラムに取り組めば，児童が自分のよさを複数の観点から多面的に自己評価する力が高まり，自尊感情を高めることにつながるであろう。

２　検証の視点と方法

検証の視点と方法について，次頁表４に示す。

表４　検証の視点と方法

検証の視点	方法
道徳学習プログラムにおいて児童同士の相互理解を深めることができたか	授業アンケート（事前・事後） ワークシート
道徳学習プログラムにおいて児童は自分のよさを複数の観点から多面的に自己評価する力を高めることができたか	自分についてのアンケート（事前・事後）
相互理解を深める道徳学習プログラムは，自尊感情を高めることに有効であったか	道徳アンケート（事前・事後）

３　検証のための質問紙調査

本研究では，次の二つの質問紙調査により検証する。

○「自分についてのアンケート」

【 目 的 】
複数の観点から多面的に自己評価する力が高まったかを検証するため。
【実施時期】道徳学習プログラムの前後
【質問項目】自分はどんな人だと思いますか。
【回答方法】児童による記述
【回答時間】10分間
【検証方法】
児童による自分についての記述内容（以下，自己描出内容とする。）を肯定的な評価と否定的な評価に分けた後，肯定的な評価の内容を佐久間ら（2000）の理論を基に，表５に示すように「行動」「人格特性」の二つの上位カテゴリー及び八つの下位カテゴリーのうち，どれについて言及されているか分類する。言及されている場合には１点，言及されていない場合には０点として言及得点を算出し，各カテゴリーの一人当たりの平均値を出して変容を見取る。

なお，本研究では，学級活動においてねらう道徳的実践に係る見取りのカテゴリーとして「行動」を設定し，道徳科においてねらう道徳的価値の自覚の深まりに係る見取りのカテゴリーとして「人格特性」を設定する。

○「道徳アンケート」

【 目 的 】
自尊感情を高めることの有効性を検証するため自尊感情測定尺度（東京都版）を基に作成。
【実施時期】道徳学習プログラムの前後
【回答方法】４段階評定尺度法
【検証方法】
各質問項目の回答を点数化し，「とてもそう思う」を４点，「まあまあそう思う」を３点，「あまりそう思わない」を２点，「全くそう思わない」を１点として，平均値を出して変容を見取る。

表５　自己描出内容分類カテゴリー

上位カテゴリー	下位カテゴリー	児童の自己描出内容の具体例
行動	①外向的行動	よくしゃべる 思ったことが言えない
	②協調的行動	助ける，仲良くする けんかする
	③勤勉的行動	規則を守る 忘れ物をする
	④能力評価を含む行動	勉強ができる 走るのが速い スポーツが苦手
人格特性	⑤外向性	明るい，おもしろい 元気，おしゃべり
	⑥協調性	優しい，親切，素直 わがまま，暴力的
	⑦勤勉性	真面目，不真面目
	⑧全般的評価語	いい子，普通の子 悪い子，おりこう

Ⅳ　研究授業について

１　研究授業の内容

○　期　間　平成28年６月16日～平成28年７月19日
○　対　象　所属校第３学年（１学級18人）

２　研究授業の概要

道徳科と学級活動との関連を図った道徳学習プログラムの概要を次頁表６に示す。

Ⅴ　研究授業の分析と考察

１　道徳学習プログラムにおいて児童同士の相互理解を深めることができたか

児童同士の相互理解を深めることができたかを見取るために，道徳学習プログラムの事前と各授業の事後に行った「授業アンケート」の結果等を整理し，検証する。まず，相互理解の深まりに係る児童の意識の変容について次頁図２に示すように，プログラムの事前に行った「授業アンケート」と第４時の道徳の授業の事後に行った「授業アンケート」の結果を比較したところ，肯定的な回答をした児童は，

表６　相互理解を深める道徳学習プログラムの授業の概要

	学習内容と領域等	ねらい	児童の意識の流れ
自分のよさについて自己理解を図る段階	**第１時　道徳の授業** 主題名　自分のよい所 内容項目　【Ａ　個性の伸長】 教材名　「お母さんの『ふふふ。』」 出典　【日本文教出版】	お母さんの「ふふふ。」を聞いた「わたし」の気持ちを考えることを通して，誰にでもよい所があることに気付き，自分や友だちのよい所を見付けようとする意欲を育てる。	・自分の特徴を知るって大事だな。 ・だれにでもよい所はあるな。 ・自分や友だちのよい所を見付けたいな。
	第２時　道徳の授業 主題名　長所を見付けて 内容項目　【Ａ　個性の伸長】 教材名　「つくればいいでしょ」 出典　【日本文教出版】	「わたし」が今まで思っていた長所と長距離の練習を続けて見付けられた長所との違いを考えることを通して，人と比べてよくできる所だけでなく，自分の中でいいと思う所や以前の自分よりできるようになった所も長所であることに気付き，自分の長所を積極的に見付けようとする意欲を育てる。	・人と比べてよくできる所だけでなく，自分の中でいいと思う所も長所なんだ。 ・自分の長所を見付けていきたいな。
	第３時　学級活動（２） ウ　望ましい人間関係の形成 題材　「発見！みんなのよさ」	友だちのよい所をカードに書き，伝え合うことを通して，自分のよい所に気付く。	・自分のよい所を見付けてもらえてうれしい。 ・これからも自分や友だちのよい所を見付けていこう。
互いのよさについて相互理解を図る段階	**第４時　道徳の授業** 主題名　いろいろな考えを大切に 内容項目　【Ｂ　相互理解，寛容】 教材名　「一年生との交流会」 出典　【文溪堂】	お父さんの言葉を聞いて，かずきが思ったことを考えることを通して，自分の考えや意見を伝えるとともに，相手のことを理解し，自分と異なる意見も大切にしようとする意欲を育てる。	・自分とは違う友だちの意見を聞くことで，もっといい考えが出せるんだ。 ・友だちの意見をしっかり聞いて大切にしていきたい。
	第５時　学級活動（１） ア　学級や学校における生活上の諸問題の解決 議題　「『もっと仲良し！お楽しみ会』の内容を考えよう」	お互いの意見を大切にしながら，学級のみんなが楽しめる「お楽しみ会」の内容を考える。	・自分の意見だけではなく友だちの意見も大切にして，みんなが楽しめるお楽しみ会の内容が考えられてよかった。
	第６時　学級活動（１） ア　学級や学校における生活上の諸問題の解決 集会名　「もっと仲良し！お楽しみ会」	お互いの意見を大切にしながら，みんなで決めた活動を楽しむ。	・みんなで話し合って決めたことを楽しもう。 ・これからもみんなの意見を大切にして，楽しい学級をつくろう。

４人増加した。

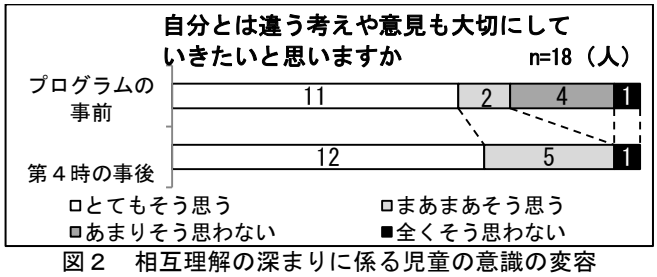

図２　相互理解の深まりに係る児童の意識の変容

また，展開後半での「これから，友だちの考えと自分の考えが違う時，どうしますか。」という発問に対し，「友だちの理由と自分の理由を言い合う。」「友だちの考えの理由を聞く。理由を聞いたら考えが変わるかもしれないから。」「友だちの考えの理由を聞き，納得できたら自分の考えを変える。」などの意見が多く出されたことから，自分の考えの理由を話したり，相手の考えの理由を聞いたりして，お互いが納得できる考えを導き出し，相互理解を深めようという児童の意識が高まったと考える。

また，事前事後ともに否定的な回答をしたＡ児も第５時の学級活動（１）で，ワークシートに次のような記述をしており，多様な考えを一つの新たな考えにまとめ，相互理解を深めることができたことを学級のよさとして認識していた。

> いっぱいやりたいことがあったけど，みんなで話し合って一つに決められたから，それはみんなのよさだと思います。

Ａ児のワークシートの記述

次に，第５時の学級活動（１）の事後に行った「授業アンケート」の結果から考察する。

第５時の学級活動（１）では，第６時の学級活動（１）でやりたいことを話し合って決めた。第４時の道徳の授業で内容項目「相互理解，寛容」についての道徳的価値の自覚を深めた後，道徳的実践の場

として設定した第５時の学級活動（１）の事後アンケートにおいて，18人中15人の児童が友だちの考えや意見を尊重することができたと肯定的な回答をしていた。そして，「友だちの考えを聞いて，自分の考えと比べたり，新しい考えに気付いたりすることができましたか。」という質問項目に対しても，18人中15人の児童が肯定的な回答をしていた。

これらのことから，道徳学習プログラムにおいて，自分のよさについて自己理解を図る段階と友だちと互いのよさについて相互理解を図る段階を設定し，各段階で内容項目「個性の伸長」又は「相互理解，寛容」を中心的に取り上げて指導し，道徳科と学級活動との関連を図ったことで児童同士の相互理解を深めることができたと考える。

２　道徳学習プログラムにおいて児童は自分のよさを複数の観点から多面的に自己評価する力を高めることができたか

児童が自分のよさを複数の観点から多面的に自己評価する力を高めることができたかを見取るために，プログラムの事前と事後に行った「自分についてのアンケート」の結果を整理し，検証する。まず，図３のように，児童の自己描出内容を肯定的な内容と否定的な内容に分類し，事前と事後を比較したところ，「行動」についての記述の76.4％が肯定的な内容になり，事前より37.3ポイント上昇した。また，「人格特性」についての記述の80. 0％が肯定的な内容になり，事前より55.0ポイント上昇した。「行動」に関する自己描出内容については,「走るのが速い。」「一輪車が得意。」などの記述が増え，「人格特性」については，「優しい」「元気」といった記述が増えていた。

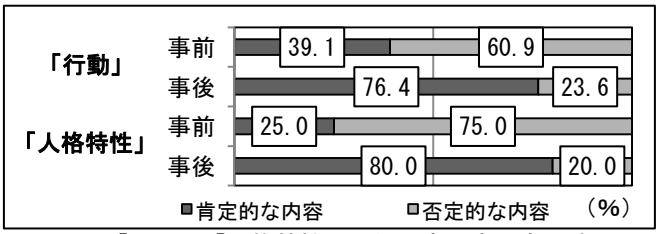

図３　「行動」「人格特性」に係る全児童の全記述のうち肯定的な内容と否定的な内容の記述数の割合

また，「行動」について，事前より記述している下位カテゴリーの数が増加した児童は17人中12人であった。「人格特性」については，事前に記述していた児童は１人しかいなかったが，事後は，４人の児童が記述しており，３人増加していた。次に，児童の自己描出内容を上位カテゴリー及び下位カテゴリーに分類し，言及されている場合には１点，言及されていない場合には０点として言及得点を算出した。上位カテゴリーの言及得点の一人当たりの平均値を図４に示す。「行動」「人格特性」についてそれぞれの言及得点の一人当たりの平均値の事前と事後を比べると，「行動」の平均値は，1.3点上昇し，「人格特性」の平均値は0.4点上昇した。

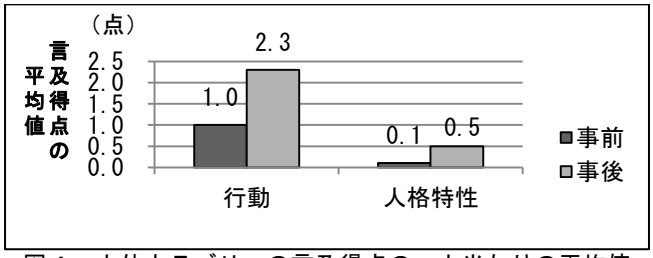

図４　上位カテゴリーの言及得点の一人当たりの平均値

さらに，「行動」の下位カテゴリーの言及得点の一人当たりの平均値は，図５に示すとおりである。それぞれの言及得点の一人当たりの平均値の事前と事後を比べると，①外向的行動は0.3点上昇，②協調的行動は0.3点減少，③勤勉的行動は0.1点減少，④能力評価を含む行動は1.3点上昇という結果であった。

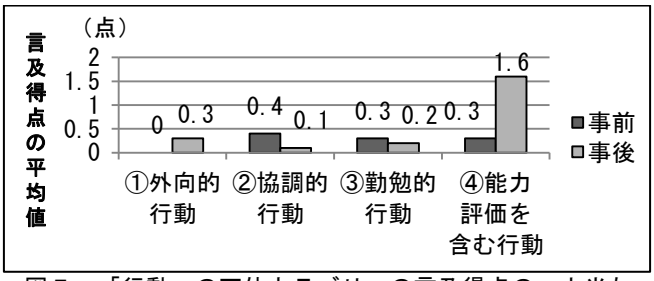

図５　「行動」の下位カテゴリーの言及得点の一人当たりの平均値

また，「人格特性」の下位カテゴリーの言及得点の一人当たりの平均値は，次頁図６に示すとおりである。それぞれの言及得点の一人当たりの平均値の事前と事後を比べると，⑤外向性は0.2点上昇，⑥協調性は0.1点上昇，⑦勤勉性は0.1点上昇，⑧全般的評価語は0.1点減少という結果であった。

とりわけ④能力評価を含む行動と⑤外向性の平均値が上昇した要因としては，第３時の学級活動で児童が友だちのよさとして記述していた「行動」に関わる内容のうち54.5％が得意な所や上手な所など④能力評価を含む行動についての内容であったことと「人格特性」に関わる記述内容のうち58.8％が⑤

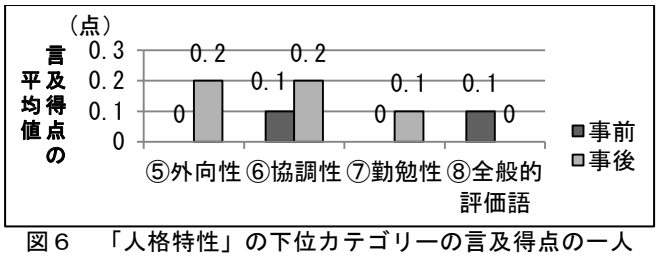

図６　「人格特性」の下位カテゴリーの言及得点の一人当たりの平均値

外向性についての内容であったことから，これら二つの下位カテゴリーについて児童が強く意識するようになったことが考えられる。

これらのことから，友だちと互いのよさを伝え合ったことで，児童は自分のよさを複数の観点から多面的に評価できるようになり，自己評価の力を高めることができたと考える。

３　相互理解を深める道徳学習プログラムは，自尊感情を高めることに有効であったか

相互理解を深める道徳学習プログラムが自尊感情を高めることに有効であったかを見取るために，プログラムの事前と事後に行った「道徳アンケート」の結果から検証する。図７のように，各質問項目の回答を点数化して算出した平均値の事前と事後を比べると，「自分にはよい所がある」という項目の平均値は0.1点上昇した。否定的な回答から肯定的な回答に変容したＢ児は，プログラムの前は「自分にはいい所なんて一つもない。いい所を見付けたいとも思わない。」と発言していた。しかし，第３時の学級活動では「みんなによさを見付けてもらってうれしかった。これからもみんなのいい所を見付けたい。」と感想を書き，事後の「自分についてのアンケート」には，友だちから伝えられたことを自分のよさとして書いていた。このことから，道徳科でよさについての理解を深めた後，学級活動で友だちとよさを伝え合う活動を行ったことが自分のよさに気付き，認めることにつながったと考える。次に，「みんなの役に立っている」という項目の平均値は0.4点上昇した。これは，児童が話合い活動で自分の意見が尊重され，生かされたことや，話合い活動及び集会活動で役割分担をしたこと等の経験を通して学級の中で自分が役に立っていることを実感できたためと考える。一方で「今の自分でよい」という項目の平均値は0.4点減少した。これは，自己評価の力が高まったことで自己の可能性に気付き，課題意識が高まり，自己評価の基準が高まったことに起因すると考えられる。

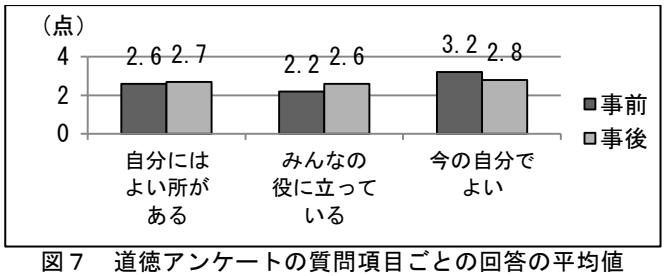

図７　道徳アンケートの質問項目ごとの回答の平均値

これらのことから，相互理解を深める道徳学習プログラムの取組は，自分のよさに気付き，よさを認めることができたことで現状志向的な面で自尊感情を高めることができたと同時に自己の可能性を感じ，さらに自分のよさを伸ばそうとする上昇志向的な面でも自尊感情を高めることに有効であったと考える。

Ⅵ　研究のまとめ

１　研究の成果

相互理解を深める道徳学習プログラムにおいて，自分のよさについて自己理解を図る段階と友だちと互いのよさについて相互理解を図る段階を設定し，各段階で道徳科と学級活動との関連を図った。その結果，児童が自分のよさについて複数の観点から多面的に評価できるようになり，自尊感情を高めることにつながることが分かった。

２　研究の課題

本研究においては，複数の観点から多面的に自己評価ができず自尊感情が高まらなかった児童がいた。今後は，児童がより広い視野から自分のよさに気付き，よさを認められるようにしていくために，集団や社会との関わりが含まれる内容項目との関連を図った道徳学習プログラムへと発展させていく必要がある。

【注】

(1) 内容項目「個性の伸長」及び「相互理解，寛容」の指導の要点は，文部科学省（平成27年）：『小学校学習指導要領解説特別の教科　道徳編』p. 33，47を参考にし，稿者が作成した。

【引用文献】

1)　中島義明他編（1999）：『心理学辞典』有斐閣p. 343
2)　中央教育審議会（平成20年）：『幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）』http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2009/05/12/1216828_l.pdf
3)　永田繁雄（2006）：「セルフエスティームを育てる」『道徳教育　No. 581』明治図書出版pp. 69-71